

「うちへ帰りたい」

スヘイル・ハンマードにおける「ワタン」と女のセクシュアリティ

佐藤 愛

I. はじめに

スヘイル・ハンマード (Suheir Hammad/سهيير حماد) はパレスチナと米国、それぞれの周縁から言葉を紡ぐ女性英語詩人だ。1973年、パレスチナ難民2世の両親のもと、ヨルダンのキャンプで生まれたハンマードは、5歳でニューヨークへ渡り、ブルックリン (Brooklyn) 区の有色人種層が多い貧困地域¹で育った。やがて詩人として頭角を現し、口語英語とアラビア語パレスチナ方言を織り交ぜた独自の文体で知られるようになる。

自他ともに認めるパレスチナの娘であり、ブルックリンの娘でもある彼女にとって、「ワタン/Homeland」と呼べる場所は、ひとつの土地ではなく、物理的な境界に縛られる存在でもない。そんなハンマードの作品²には、難民の娘、そして有色かつ労働者階級の女としての生育背景が色濃く映し出される。しかも彼女が描く諸テーマは、ある糸でつながれているようにすら思える。その「糸」とは、自分はこの世界のどこでも必ずある種の「異邦人」なのだ、という感覚だ。彼女はパレスチナ難民の子孫であり、先祖代々の故郷へ帰れない³。また有色の人間ゆえに、自分に市民権を与えた国家にも疎外されている。そして女性であるため、男性中心的な世界の縁に追いやられている。この「異邦人」性を敏感に捉える詩人にとって、自らが帰属できる場へ「帰る」ことはきわめて重要なテーマであり、その帰還の道筋も物理的な帰還のための闘争からイメージ上のものに至るまで多様だ。そして「ワタン」にしても、そこへの帰還にしても、詩人個人の女としてのセクシュアリティを通して思い描かれていることに、ハンマードにおける「ワタン」表象の大きな特徴がある。本稿ではハンマードの作品のいくつかを取り上げ、そ

¹ 詩人が育ったのはブルックリンのサンセットパーク (Sunset Park)。ラティーノ系、アフリカ系などの有色住民が多数を占める。

² ハンマードはこれまで『パレスチナ人に生まれて、黒人に生まれて (*Born Palestinian, Born Black*)』(1996)、『ザアタルディーヴァ (*ZaatarDiva*)』(2005)、『ブレイキング・ポエムス (*breaking poems*)』(2008)の3冊の詩集を発表。1996年には、幼少時から20歳ごろにかけての回想録『この物語の滴たち (*Drops of this Story*)』も刊行した。

³ 厳密には、米国籍の彼女はパレスチナの地を踏めるが、それはあくまで「訪問」でしかない。

のワタン像がセクシュアリティやジェンダー、レイシズムの問題といかに結びついているかを考察し、彼女が思い描く「ワタンへの帰還」の道程のひとつを照らしてみたい。

II. ハンマードにおける home と「身体」

1. 「ワタン」とはどこか、「帰還」とは何か

ハンマードのデビュー詩集『パレスチナ人に生まれて、黒人に生まれて』(以下『生まれて』)の巻頭作「献呈 (dedication)」は、難民とその子孫たちが抱くパレスチナへの「帰還」の願いを描いた作品だ。作品は、とあるパレスチナ難民の青年の物語で始まる(ハンマードの若くして亡くなったおじがモデルである)。彼が焦がれる「ワタン」は、イスラエル建国によって奪われたパレスチナの地そのものだ。ヨルダンの山から死海の対岸を眺めながら、青年は、ワタンを追われなければ送っていたはずの生活を想像する。

closing his eyes	目を閉じて
wondered what it would've been like if we'd been left alone	彼は思う もし自分たちが放っていて もらえていたらどうなっていたかと
he'd be with his family	彼は家族といて
rejoicing a wedding instead of mourning another death	結婚式を祝っていただろう 新たな死を悼むその代わりに
he'd go to school and write poetry about the sky the sun love	彼は学校に行き 書いていただろう 空 太陽 愛についての詩を
he'd sleep in a bed in a house	彼は眠っていただろう ベッドの中で 家の中で
not on floors of tents	テントを張った地べたの代わりに ⁴

この人間らしい生活は、彼の人間性を奪い去る難民としての生⁵と対比される。「この命をかけて この血をかけて」⁶ 武装闘争によって故郷に戻ると青年は誓う。だが彼は志半ばで殺され、その願いは彼の姪——ハンマード自身が重ねられている——に受け継がれる。中東から遠い場所(おそらく米国)に住む姪は、ヨルダンを訪れ、山に登る。

⁴ Hammad 1996a: 3-4.

⁵ Hammad 1996a: 4.

⁶ Hammad 1996a: 5.

sees palestine over the sea		〔姪は〕 海の向こうにパレスチナを見て
feels her uncle's heart join hers		おじの心が自分の心に溶け込むを感じる
(……)		る (……)
she vows she'd return to <i>phalesteen</i>		彼女は誓う ファレスティーンへ帰ると
<i>ib rohi</i>	<i>ib demi</i>	イブ・ルーヒー イブ・デミー
with my life	with my blood	私の命をかけて 私の血をかけて ⁷

ワタンとしてのパレスチナへの想いの丈と帰還の願いは、世代を超えて受け継がれる。その帰還を叶えるための闘いはまさしく人間性を取り戻すための闘いで、だからこそパレスチナの地を遠く離れて世代を跨いでも「命をかけて 血をかけて」闘うべきものとして、変わらぬ強度で受け継がれるのだということが、「献呈」で表現されている。

だが詩人は、パレスチナの地へ戻るという悲願が叶えば全ての苦しみが解決すると考えているわけではない。「献呈」で始まる詩集『生まれて』は「傷ついてベイルート (broken and beirut)」という詩で閉幕する。ここで詩人は、人間らしく生きられる「ワタン」へ帰るには、地理的「パレスチナ」へ帰る、または政治的に独立した「パレスチナ」を取り戻すだけでなく、未来の次元の全く新たな「パレスチナ」を目指すことだ、と語る。

作品の前半では、人々が「ベイルート」の瓦礫の中をさまよひ、爆撃で四散した遺体を拾い集めるさまが描かれる⁸。「ベイルート」は直接的にはレバノンの首都を指し、詩が書かれた 1996 年にイスラエルが行ったレバノン侵攻への言及と考えられる⁹。だがこの「ベイルート」には、作中に現れる「'48」といった年号などにより、「パレスチナ」も重なる¹⁰。また作中の「私たち (we)」は、遺体を回収しているかと思えばネイルアートに没頭して現実逃避しており¹¹、中東の人々なのか、欧米で見て見ぬふりをする人々なのか意図的にぼかされている。この「ベイルート」における殺戮の繰り返しを詩人は「知っているもの」への“return”と呼ぶ。

⁷ Hammad 1996a: 5-6.

⁸ Hammad 1996a: 96.

⁹ 1996 年 4 月 11 日から 27 日にかけて行われた軍事侵攻。1978 年の第 1 次レバノン侵攻から数えて 4 度目。イスラエル軍はこの侵攻の目的を、南レバノンの武装組織ヒズブラーによる攻撃の阻止と説明した。だが実際には北部にある首都ベイルートも爆撃され、レバノン全土で 150 人超の一般市民が殺された [Human Rights Watch 1997]。

¹⁰ 「48 年」はイスラエルが建国され、パレスチナ人の苦境が始まった「ナクバ」の年である。脚注 20, 22 を参照。

¹¹ Hammad 1996a: 95.

we always return to what we know	私たちは知っているものに舞い戻るから
and if that's war	そしてそれが戦争なら
we return over and over to it	私たちは何度もそいつのところへ
sit at it's feet to	そいつの足元に座って
remove stone shoes bones and	取り除いてあげるのだ 石 靴 骨と
blues	憂鬱を ¹²

だが詩の後半では、「知っているもの」への“return”と対をなす願いがうたわれる。

i want to go home	うちへ帰りたい
(……)	(……)
i want to remember what i've never	自分では生きたことのないものを思い出
lived	したい
a home within me within us	私の中に 私たちの中にあるうちを ¹³

今「知っている」暴力の繰り返しではなく、「自分では生きたことのないもの」へ帰りたいと詩人は語る。この詩句について、パレスチナ系アメリカ人の文学研究者リサ・スハイル・マッジャージュは「帰還とは、家父長制的構造への帰還ではなく、新たに創られた故郷への帰還だ」¹⁴と記す。米国の文学研究者キース・フェルドマンも同じ詩句をふまえ、home が「未だ存在しないものへの帰還として想像されている」¹⁵と述べている。

そのような「未来の home」とはいかなる場所だろうか。マッジャージュの論では、「帰還とは、家父長制的構造への帰還ではなく」¹⁶という一言から、ハンマードの「未来の home」にジェンダーの視点が含まれていることが分かる。またフェルドマンは、『生まれて』所収「明白なる大命 (manifest destiny)」などの作品は米国の大都市における人種や性別を超えた共同体を描いたものだと論じたうえで、「傷ついてベイルート」では同じような越境的共同体が、米国だけでなく世界全体を舞台に希求されているとする¹⁷。

このような希求は他の詩にも描かれる。ハンマードは、2005年に米国を襲った巨大ハリケーンを主題とした「避難と言語について (On Refuge and Language)」で、ハリケー

¹² Hammad 1996a: 95.

¹³ Hammad 1996a: 96.

¹⁴ Majaj 2001: 117.

¹⁵ Feldman 2007: 64.

¹⁶ Majaj 2001: 117.

¹⁷ Feldman 2007: 67.

ン被災者からパレスチナ難民まで、不正義によって home を失った¹⁸世界の「難民たち (refugees)」をひとつの「民 (people/folk)」と表現する。故郷を追われた人々 (パレスチナ難民) と祖国にいながら「異邦人」として扱われ命を軽んじられた人々 (被災者) は、ワタンを奪われたという点において同じだ。詩人はこれを強調して連帯を促し、その連帯に基づく越境的共同体を想像する。

つまり、ハンマードの「未来の home」には、ジェンダー的抑圧からの解放と、国や民族の境を超えて人々がつながる新たな共同体の形成が織り込まれているのだ。これを踏まえて以下では「傷ついてベイルート」本文で描かれる home 像を読み解いてみたい。

2. 帰還への道としての「身体」

「傷ついてベイルート」において、home はおおよそ 2 種類の表現で描かれる。まず、“before …” という形式を用いて、「かつての home にはあったが未来の home にはないものは何か」、すなわち「未来の home には何が存在すべきでないか」を語る表現である。

i want to go home	うちに帰りたい
not only to mama and baba	マーマーとバーバー ¹⁹ のところだけじゃなく
i want to go home to before me and	くて 帰りたいのは私自身が
pain bombs and war before	痛みが 爆弾と戦争が
loveless sex poetry and	愛のないセックスが 詩が チョコレート
chocolate	が生まれる前のうち
(……)	(……)
before 1996 1982 '73 and '48	1996 年 1982 年 73 年 48 年よりも昔へ ²⁰
before tv race marriage and	テレビ 人種 結婚 そして肉よりも昔
meat	へ ²¹

¹⁸ ハリケーン被災者たちが「不正義によって」家を失ったというのは、米国の人種差別的・階級差別的構造ゆえに、有色・貧困層の人々が最も甚大な害を被ったからだ[Eyerman 2015: 5-6]。

¹⁹ māmā, bābā. アラビア語で「ママ」および「パパ」の意。

²⁰ これらの年号は全てハンマードの人生とパレスチナ問題に関係している。1996 年は「傷ついてベイルート」が書かれた年で、詩が書かれたきっかけの第 4 次レバノン侵攻の年である。1982 年は第 2 次レバノン侵攻の年で、同年、ベイルート郊外のサブラー・シャティーラ両難民キャンプで、イスラエルの支援を受けたレバノンの右派民兵がパレスチナ難民を大量虐殺した。1973 年は第 4 次中東戦争の年かつハンマードの生年である。1948 年はイスラエルが建国され 70 万人のパレスチナ人が難民となった「ナクバ」の年で、ハンマードの祖父母もこのとき難民となった。

²¹ Hammad 1996a: 97.

ここで列挙された事物はすべて、明示的に、あるいは暗示的に、否定的意味を持っている。例えば「チョコレート」は白人から見て「チョコレート色」をした肌のことで、白人の視点でつくられた、差別・抑圧の内在する社会的構築物としての「人種」への言及と考えられる。また、現在のアフリカ各地、「チョコレート」を生産するカカオ農場でおこなわれているような、新植民地主義的な労働の搾取も連想される。いずれにせよ「チョコレート」は、白人／植民者が搾取し食い荒らす対象としての「有色人種」ではないか。「肉」も、性暴力に繋がらうる「愛のないセックス」や女性を家父長制的構造の中で抑圧するものとしての「結婚」を忌む心などが書き込まれていることから、文字通り食肉のように食物にされる女性の肉体の比喻だと解釈できる。これらからは、ありてい
に言えば、ナクバ²²もレイシズムもセクシズムも「存在しない」、全ての抑圧から解放された場所への希求が見える。目指されているのは、実際はさまざまな抑圧があったろう過去のパレスチナではなく、これからつくられる未来にしかない場所なのだ²³。

他方、“(return) to …” という形式で、「我々は何へと戻るべきか」を語る表現もある。第 10 連から第 11 連にかけてあらわれる、この類いの表現を列挙してみよう。

return to the belly of my honey (私の蜜で満たされたお腹へ帰る)

return to the whiteness of black (黒の白さへと帰る)

to the drum the hum the sum of my parts (あの太鼓の音 あのハミング 私の部位の総体へ)

to god (神へ)

the boiling in my belly (私のお腹の底で煮え滾るもの)

これらを概観すると、身体に根差した表現の多さに気づく。“belly (腹)” に言及しているものはもちろん、“drum (太鼓の音)” や “hum (ハミング)” は手や口が奏でる音であり、“the whiteness of black” も「肌の色」への言及として読める²⁴。さらに、この詩

²² The Nakba (النكبة). アラビア語で「大いなる破局」「大災厄」を意味するこの語は、脚注 20 でも触れたとおり、1948 年のイスラエル建国によって 70 万のパレスチナ人が故郷を追われて難民と化した出来事を指して使われる。

²³ この読み解きから、Feldman 2007 および Majaj 2001 で示唆されている「家父長制的構造のない」、人種や国籍を超えた「越境的共同体」への「帰還」という構図も裏付けられるといえる。

²⁴ ハンマード自らによる『生まれて』の序文には、「黒人」に紐づけられてきたステレオタイプに抗う文脈で、「黒とは相対的に純であることだ」という趣旨の言葉が記されている [Hammad 1996a: x]。これを踏まえると、「黒の白さへ帰る」とは「これまで否定されてきた黒い肌の人間の善性へ立ち返る」という意味に読める。

において“parts（身体部位）”とは何よりもまず爆撃で吹き飛ばされた遺体の部位のことだ。同時に、一人の人間が肌の色や髪という「人種」の徴を示す部位や乳房や唇など性的意味を示す部位に「切り分けられ」てまなざされることへの言及でもありうる。そのような parts が再び集められて人間の身体の形をなすということは、奪われ破壊された身体を再び自分のもの、まったきものとしようという呼びかけだろうか。一見身体と無関係な“god（神）”すら、4節で詳述するようにハンマードが性愛と「神」を関連づけていることをふまえれば、身体とつながる。これらからすると、詩人は「私たち」に、自らの「身体」とその善性・重要性を見つめ直すことを促しているようだ。

つまり、「何が存在しない home へ帰るか」の表現は、レイシズムもセクシズムもない未来の home への希求であり、「何を目指して帰ってゆくか」の表現は、身体を通して自らの人間性の根源的な意味を捉え直すことを促すものだ。これらを重ね合わせると、身体とその意味を介して、抑圧なき「未来の home」へ接近するという構図が見えてくる。

III. 「身体」が連帯を阻むとき

1. 脅かされる有色の身体

だが、「身体に立ち返る」ことがなぜ「未来の home」への接近になりうるのか。これに答えるため、ハンマードにおける「身体」がそもそもいかなる存在かを考えたい。

身体（body）はハンマード作品に頻出する主題だが、殊に切迫した筆遣いで描かれるのは、マジョリティから「脅威」「犯罪」とまなざされ、銃口を向けられる有色の身体だ。パレスチナ・アラブ人は、長らく「テロリスト」と名指され、偏見や憎悪をぶつけられてきた²⁵。このレッテル貼りは9.11後の米国で激化し、「アラブ的・ムスリムの」身体の持ち主を標的とした権力濫用や憎悪犯罪が急増した²⁶。アフリカ系をはじめとした米国の有色人種層も、彼らの身体の徴を「犯罪」と認識するマジョリティに脅かされている。ハンマードが10代・20代を過ごした1980年代から1990年代の米国では、黒人市民がただ「黒人」というだけで警戒され、警官に暴行・殺害される事件が多発した²⁷。

パレスチナ・アラブ人と黒人の身体が「脅威」「犯罪」と見なされ脅かされるさまはよ

²⁵ Shaheen 2003: 188-189.

²⁶ Disha et al. 2011. なお「的」というのは、「見た目がそれらしい」という理由で、非アラブ人や非ムスリム（シーク教徒など）も憎悪犯罪の被害に遭っているため [Sikh Coalition 2014].

²⁷ ニューヨークの黒人男性マイケル・スチュワートが警官に殴り殺された事件（1983年）やロサンゼルス黒人男性ロドニー・キングが警官からリンチを受けた事件（1991年）などが代表的。

く似ている。それをハンマードは繰り返し強調し、国や民族の境を超えた連帯を訴える。例えば『生まれて』所収「タクシー (taxi)」では、パレスチナ難民と米国黒人が生きる状況の悲惨さや両社会における抵抗の象徴がなぞらえられ、遠く離れた二つの土地における闘いが架橋されている²⁸。

詩人はまた、有色／パレスチナ人の男性身体——白人／植民者を中心とした世界が脅威としか見なさないもの——を美しく愛すべきものとして描く。「以来、初めて書くもの (first writing since)」には、9.11 後のアラブ・ムスリム憎悪をふまえた一節がある。

both my brothers (……) both palestinian, practicing muslim, gentle men. both born in brooklyn and their faces are of the archetypal arab man, all eyelashes and nose and beautiful color and stubborn hair.	私の弟たちふたり(……) どちらもパレ スチナ人、信仰を实践するムスリム、や さしい男たち。どちらもブルックリン 生まれ、顔は典型的なアラブの男のそ れ、とにもかくにも睫毛と鼻と美しい 肌の色と頑固な巻き毛。 ²⁹
---	---

弟たちの顔の描写は、彼らの肉体が憎悪の標的となることへの恐れを伝えると同時に、深い親愛の感覚を呼び起こし、一部の人間にとっては「テロ」の象徴でしかない青年たちの身体が、本当は血の通った掛け替えのないものであることを読者に訴えかける。

このように、ハンマードが描く「身体」の一つは、レイシズムに基づくレットルによって脅かされ殺される「身体」であり、性別や民族を超えて護り護られるべき、愛おしむべき肉体だ。そこには越境的な同胞愛と、安全な共同体への希求が刻み込まれている。

2. 人間性を否定される女性身体の持ち主

レイシズムによって殺される「ブラザー」たちと連帯しようというハンマードの思いはしかし、実際のところ、他ならぬ男性たち自身によって裏切られている。共同体の内部におけるセクシズムが、レイシズムを前にした連帯を阻んでいるのだ。

ハンマードが男性を描く際の焦点は、有色／パレスチナ人男性への同胞愛と、男性一般への深い怒りとに分かれる。後者の怒りは、ただ「女」の身体を持っているだけで、男性からは性的に消費する「モノ」や束縛する「対象」と見なされ、人間性を否定され

²⁸ Hammad 1996a: 13.

²⁹ Hammad 2005: 101.

てしまうという現実根差している。そのような怒りを描いた作品の中で注目されることが多いのは、有色女性の身体をエキゾチックな「モノ」と見なして消費する白人男性のまなざしを批判したものだ³⁰。例えば『生まれて』所収「ご注文をお伺いしましょうか？ (may i take your order?)」では、白人男性が有色女性の身体を「オリーブ」「カフェオレ・アイスクリーム」などの「食べ物」に喩えるさまが描かれる³¹。同詩集所収の「エキゾチック (exotic)」では、このようなモノ化が「気色悪い死体性愛」と呼ばれ、「あんたのエキゾチックにはなりたくない」という言葉で拒否感が語られている³²。

だが有色の女性を「人間」と見なさないのは白人男性の専売特許ではない。抑圧とエグザイルを生きる同胞のはずのパレスチナ人／有色の男性たちも、女性を「モノ」と見なしたり、自由意志を否定したりして抑えつける。その現場のひとつが「家族」だ。

エグザイル状況では、しばしば血縁共同体が帰属の場として、また「ワタン」の記憶のレポジトリとして強化される。故郷を離れたパレスチナ人は、パレスチナ系アメリカ人詩人ハーラ・アルヤーンが「〔故郷の村の名〕を忘れてしまったとき、あなたは己を厳しく戒め、己に言い含めるのだ。思い出せなくなったらそれは (……) 消えてしまうのだ」と³³と記すように、しばしば忘却を最大の敗北として認識する。ゆえに、ワタンを家庭内で記憶し続けることは重要な抵抗の形となる。ハンマード作品にも家族を通した「パレスチナ」の記憶の継承を描いたものは多い³⁴。

だが「家族」は抑圧性を帯びることもある。男性親族は、エグザイル状況にあるからこそ故郷の「伝統」に照らして「正しい」家族の形を保とうとし、家父長制的ジェンダー規範に基づいて女たちの身体・生殖を縛ろうとする。その結果、身体を持ち主である女性の意志や人格は踏みにじられる。詩人の回想録にある、父親が彼女に結婚を強いようとする場面³⁵はその一例だ。

³⁰ Pickens 2014, Bosch Vilarrubias 2011 などこの作品群に該当する詩が論じられている。

³¹ Hammad 1996a: 61, 67-68.

³² Hammad 1996a: 69.

³³ Alyan 2016: 64.

³⁴ 『生まれて』所収「献呈 (dedication)」 「水煙草の追憶 (argela remembrance)」など。

³⁵ 「お前は結婚するのだと、父は私に言った。私たちのやり方は、父のやり方だ。18歳だった私に自分のやり方なんてまだなかったことはどうでもいいのだ。〔中略〕母は私に、化粧をしるとがみがみ言い続け、こんなにたくさん求婚者がいることを嬉しく思うべきだと言った。私は求婚されたいなんて一言も言っていないのに。父はワンピースを着ると私を怒鳴りつけた。〔中略〕この物語は、あまりにもしょっちゅう生きられている。からからに乾いた、求めてもない結婚に押し込められるんじゃないかって、不安にさせられた」 [Hammad 1996b: 36] とある。18歳の娘に対して有無を言わせない態度を取る父のほか、父に協力的にふるまう母の姿が描かれている。

『ザアタルディーヴァ』所収「引き裂かれた女の (of woman torn)」は女性身体の束縛が極端に走った例を描く。パレスチナにおけるフェミサイド (femicide) ——いわゆる「名誉殺人」——を主題とするこの詩では、妊娠した未婚の女性が父兄弟に殺される。作中の記述から、詩の登場人物たちはパレスチナにいと考えられるが、彼らもまた、人間らしく生きられる「ワタン」を占領によって奪われているという意味では、比喩的な「エグザイル」状況にある。そこで彼女を殺した父兄弟が「神と土地の名において(…)女という邪悪を呪った」³⁶ という詩句には、「エグザイル」的状況であるからこそなおさら「神と土地」に象徴される「正しい」家族の形を守らなければ、という意図に支えられたジェンダー規範が女性を殺したのだ、という批判眼がある。「あなたを愛している」³⁷ と語って、婚前に一線を越えたがために親族の男に殺された女性の魂に寄り添う詩人は、このようなことが起こらない「パレスチナ」をこそ求めているのだ。

「引き裂かれた女の」に描かれるように、エグザイル状況で「家族」がどれほど重要でも、女性を管理しようとする男性をそのトップに戴くのは苦痛であり、時には命が危険に晒されることすらある。そのため、回想録におけるハンマードの「家庭」は、絶対にそこから出ていかなければならない、けれど実際に出ていく決断をするのは妹と抱き合っただけ泣くしかないほどつらい³⁸、アンビヴァレントな場として描写される。「傷ついてベイルート」で、帰りたい未来の home の中に「マーマーとバーバーのところ」を数える連も、難民の娘としての家族・家庭への思いと、今のままの家族の元へは帰れないという悲痛な思いを同時に表現した詩句と読める。

さらに、家族以外の有色の男性もハンマードの同胞愛を裏切る。彼らにとって女性身体は性的な「モノ」であり、よしあしを判断する「対象」なのだ。『生まれて』所収「タブラの涙 (tabla tears)」には「今ここ、今夜だけは / わたしはママでも売女でもない」³⁹とある。「ママ (mama)」とは「性的に魅力的な女性」を意味するスラングだが、白人にはあまり使用されないため、詩人を「ママ」と呼んでいるのは有色の男性と推察される。対する「売女 (whore)」は、「過剰に性的である」として女性を貶める言葉だ⁴⁰。自

³⁶ Hammad 2005: 76.

³⁷ Ibid.

³⁸ Hammad 1996b: 27-28.

³⁹ Hammad 1996a: 64.

⁴⁰ このようなレッテルは、女性が実際にいかなる性を生きているかを問わず、単に男性が彼女を「気に食わない」ことを「性」にかこつけて表すものでありがちだ。だからこそハンマードはその評価軸自体を拒否するのだろう。

分は「ママ」と「売女」、そのいずれでもない、というのは、下される判定いかに関わらず、性的な審査それ自体を拒む言葉である。

このように、女性身体が意志も人間性もないモノ、あるいは意志を否定してでも束縛せねばならない対象としか見なされない場合、レイシズムと闘うための男性 - 女性間の連帯は阻まれてしまう。有色の男性である恋人との別れを描く「ブラザーたちが私を眠らせない (brothers keep me up)」（『ザアタルディーヴァ』所収）には、「きみを殺そうというやつらがいたら（……）間違っているって私が教え込んでやるから／きみは坊やじゃないって（……）きみは十分に男なんだ／〔私の〕心を完全に引き裂いて／そして振り返りもしないぐらいに」⁴¹ とあるが、恋人関係に終止符を打っても変わらず友として「きみ」を護る——あるいはそれほどの友愛を示しても、結局詩人は置き去りにされてしまう——というこの連は、個人の失恋の情景であるだけでなく、レイシズムに苦しむ仲間として女性がどれほど男性に連帯を示そうとも、セクシズムを刷り込まれた男性からは決して等価のものなど返ってこないという、同胞愛の非対称性の描写でもある。

IV. セクシュアリティがもたらす身体の意味

1. 女が欲望を語ること

未来の home を目指す過程で、レイシズムと闘う同胞のはずの男性たちが、セクシズムによって連帯の可能性を断ってしまう。この状況においてハンマードは、審美・管理・消費されてきた女の性の意味を取り戻し、変えることで、男性との関係性を問い直す。

ハンマード作品には自らのヘテロセクシュアリティを描いたものが一定数ある。例えば「私たちは7月4日をベッドで過ごした (we spent the fourth of july in bed)」や「雲がキスする (cloud kissing)」などの作品では、愛する男性との性的なふれあいの喜びが語られる。また回想録には、男性の肉体をめぐるフェティシズムを語った一節がある⁴²。このような語りも、これまで見てきたようなレイシズムとセクシズムをめぐる文脈でもつ意味とは何だろうか。

まず言えるのは、女性が自らの欲望を主体的に語るという行為自体が、女性の意志や人間性を否定するまなざしの拒否につながるということだ。例えば、『ザアタルディーヴァ』所収「愛の詩」の冒頭2連では、どこか官能的な雰囲気の中の独白が展開される。

⁴¹ Hammad 2005: 44.

⁴² Hammad 1996b: 18.

it is late raining tonight	遅い時間だ 今夜は雨
the only safe space i know	私を知る唯一の安全な空間とは
is the air still warm right after	キスのすぐあとの まだあたたかい空気
a kiss the place where lips almost	唇があともう少しで 触れ合いそうなど
meet	ころ
breath lives electric	息が電撃のように生きるころ
need is past now i hunger	もう求めるどころじゃない 私は飢えてる
not in heat but searching	発情してるわけじゃない 探しているのだ
for more than a pyre to sun me and	私を温める 火葬の薪以上の何かを そし
my body	て私の身体は
is straining against sleep	眠りに抗いこわばっている
close	もう少しだ ⁴³

この2連は一見、誰かとのセックスを描いているように読めるが、相手の気配が一切ない。ひとりで「私を温める」何かを「探している」という詩句は、自らの手でオルガズムに至ろうとしている場面のようなようだ。ここで、自慰をする女性とは、性的欲望をもち、それを自ら実現する女性といえる。そのような女性を描くことは女性の人格や意志を否定するまなざしの拒否になる。そもそも、性的欲望をもつこと自体が、家父長制的まなざしが好む「良母」「良妻」「処女」などのカテゴリーから女性をずらす。また、自らの欲望を実現しようとする女性は無意思な「モノ」ではない。さらに、彼女は男性不在の空間で自分のセクシュアリティと向き合っており、性的審美のまなざしからも自由だ。

このようにハンマードは、女性のセクシュアリティを描くことで、女性の性的身体がモノ化される、あるいは管理の対象と見なされることを一切拒否している。

2. 欲望と性愛が拓くもの

だがハンマードがセクシュアリティを描くのは、女性身体のモノ化を拒むためだけではない。彼女は「性愛とは何か」という問いに答え、新たな意味を得たセクシュアルな身体を通して、断ち切られてしまった同胞との関係を結び直すことも目指しているのだ。

「愛の詩」では、イスラエル軍に頭を撃ち抜かれて殺されるパレスチナの子どもたちを、

⁴³ Hammad 2005: 40.

「私の中 (within me)」にかくまいたいという願いがうたわれる。この「子どもたち」は、直接的には第2次インテリファード中に殺された子どもたちのイメージだろう⁴⁴。そしてその子らをかくまう「中」とは「子宮」ではないか。「頭から先に 私はいきみ (head first i would bear down)」⁴⁵ 子どもたちを自分の中へ引き込むのだと詩人は記す。head first は子どもが「頭から先に」生まれることを思わせる表現であり、bear down というのはまさに出産のために「いきむ」ことを指す。ここから、「中」とは「子宮」ではないかという連想が生まれる。「あたたかいところに 手脚が寄せあうところに／命のあるところに 赤ん坊が／やって来るところに」⁴⁶ 子どもたちをかくまう、といった表現も、温かな子宮の羊水の中で手脚をぎゅっと寄せてまどろむ胎児を思わせる。

生殖器官である「子宮」は家父長制による「管理」の主な対象となる身体部位だ。だが詩人はそれを自らの意思で使い、生み出すのではなく「引き込む」という逆方向の動きによって子どもたちを護りたいと願う。ここで女性身体は自ら「護る」力をもった存在として立ち上がる。「護る」役割は、家父長制的価値観では、女性身体の「管理者」である男性に与えられるものだ。それに類するものを女性が自ら引き受けるというジェンダー役割の転覆を、子宮に「引き込む」という不思議な逆方向の動きが象徴する。この「護る」願望はしかも、自慰をしながら思い描かれている。それにより、性的欲望と同胞を護りたいという願望が結びつけられ、混ぜ合わされている。

性愛のもつ意味を問い直す作品として、「私たちは7月4日^{独立記念日}をベッドで過ごした」も挙げたい。この作品で詩人は、愛する男性と身体を重ねた後の静かな陶酔感の中、彼の肉体の美しさと温もりを味わっている。だが彼女の脳裏には同時に、世界中で戦禍や抑圧に苦しむ人々の姿が絶え間なく去来する。それら全てを嘔みしめ、詩人は独白する。

even as we lay in		私たちが横たわり
all this good feeling		このこちよさに浸っているあいだにも
people lay in dirt	vomit	shit
and blood		泥に 吐瀉物に 糞に 血にまみれて横
and i gotta tell you		たわる人たちがいる
		だからあなたに伝えなきゃならないのは

⁴⁴ 2000年～2005年頃まで続いた第2次インテリファードで「頭を撃たれて殺される子ども」というモチーフは、パレスチナ人歌手リーム・バンナー (ريم بنا) が同じく2005年に発表した曲「サーラ (سارّة)」などと共通する。

⁴⁵ Hammad 2005: 40.

⁴⁶ Ibid.

that my sincere love	for real	わたしの真剣な愛は	本当の愛は
is for my peeps	my family	わたしの人たちに	家族に 人間存在に
humanity		捧げられているってこと	⁴⁷

詩人は、彼女の「真剣な愛」は個人ではなく「人間存在」に向けられているとする。これは、個人間の性愛が人間愛に劣るという意味ではない。むしろ、「愛という概念が世界全体、人類全体を含み込むように拡大されて」⁴⁸ いるのだ。失恋の詩「ブラザーたちが私を眠らせない」でも似たイメージが展開される。詩人は元恋人についてこう綴る。

the statistics	political promises	統計や	政治的展望が語る
you won't live to see thirty	(……)	きみはきっと三十まで生きられないと	(……)
don't believe in this	world so i fight	私はまったく信じていない	この世界を
so you'll live	to love free	きみが生き	自由に愛せるように
(……)		(……)	
i got your back even	as i watch my own	きみの背中は私が守る	そして自分の背後も見張ってる
from the hurt you left behind		きみが残していった痛み	に刺されないように
are you soft still		きみはまだやわらかいかな	⁴⁹

ここでは、元恋人の「やわらかい」肌に抱いた欲望の記憶や恋慕の思い（「まだやわらかいかな」）が、世界から「脅威」と見なされ殺されかねない有色の男性身体を持ち主である彼を同胞として護りたいという願いと、混然一体になる。こうして、詩人の性的欲望と恋愛の語りは、より広い同胞愛と連帯の願いに直結する。詩の題が 'brothers keep me up' と複数形になっていることの意味がここにある。

これを念頭において「愛の詩」に戻ろう。詩の終わり近くでは、「性愛とは何か」という問いについて思案がめぐらされる。

⁴⁷ Hammad 2005: 40-41.

⁴⁸ Abuelhiga 2013, 強調は筆者による。

⁴⁹ Hammad 2005: 43-44.

it is said sex is	いわく性愛とは
in the head where god is	頭の中にあり神様のところにあり
where too ancestry where	先祖もいるところ
vision and memory	<small>ヴァイジョン</small> 未来像と記憶と
and the ability to hear angels	天使の声を聞く力のところにあるとか ⁵⁰

「性愛とは (……) 神様のところに」という言葉は、身体的で個人的なものを崇高で普遍的なものに結びつける。「先祖」という言葉も、個人的な「性愛」を共同体や歴史に位置づける。さらに「未来像 (vision) と記憶」という一見矛盾するものに同時に結びつくのが「性愛」なら、それは「自分では生きたことのないものを思い出し」⁵¹、その「未来の home」へ帰るという「傷ついてベイルート」の思想に通じる。これらのイメージは「天使の声を聞く力」という言葉でひとつにまとまる。「天使の声」は崇高ながら個人に語り掛け、ほとんど誰も聞いたことがないながら確かに存在していると想像されるからだ。このように既存の境界をぼかし、過去と未来をつなぐ力が「性愛」ならば、それを介して一見無関係の欲望・願望や愛情が混ざり合うのも不思議ではない。

すなわちハンマード作品において、性的欲望と連帯の願望、性愛と同胞愛を溶け合わせる女性のセクシュアリティは、男性中心の「性愛」認識の埒外にある。またジェンダー規範に基づく管理や役割を転覆する可能性さえもち、そのジェンダー規範によって彼女たちをはじき出してきた同胞男性たちを何度でも包み込むものとして思い描かれている。このような「欲望」や「愛」が自由に解き放たれ、「性愛」のあり方やジェンダー規範が問い直されるならば、それは現在の世界で身体を脅かされる者たちにとっても、新たな帰属の場を拓く道になりうるのだ。

V. おわりに——女の性が導く「ワタン」

ハンマードにおける「ワタン」とは、彼女がいつか帰りたいと願う土地を指すだけでなく、未だ存在したことのない「未来の home」のイメージでもある。その「未来のワタン」は、相通じる苦境を生きる人々が国家や民族の境を超えて連帯することで成立する、

⁵⁰ Hammad 2005: 40.

⁵¹ Hammad 1996a: 96.

抑圧のない理想の世界だ。だがその「ワタン」の実現へ向かうとき、壁が立ちはだかる。白人／植民者を中心に回る世界のレイシズム、そして本来なら連帯の相手であるはずの同胞男性のセクシズムである。

「ワタン」の実現を阻むレイシズムとセクシズムは、肌や顔や性器などといった「徴」を有する生身の肉体を現場として「起こる」。だからこそ、ハンマードが思い描く「ワタン」への道程のひとつは、自らと同胞の身体から始まる。彼女の詩の言葉は、有色の男女の身体に貼られたレッテルの意味を変えていく。中でも大胆に読み替えられるのは女のセクシュアリティがもつ意味だ。ハンマードの詩において、女性が主体的に紡ぐ「性愛」は、男性中心にイメージされる「性愛」とは異なり、時間と空間、民族と家族、個と全などにまつわる既存の境界をぼかしてずらす、全く新しいものである。そのような「性愛」を紡ぐ女性身体は、管理されたり消費されたりするのではなく、自ら護り闘うという新たな役割を引き受け、ジェンダーに基づくステレオタイプや役割、抑圧の構造を転覆させる。またそれを通して、レイシズムに脅かされる同胞男性を切り捨てずに再び包摂するという、連帯に基づく共同体の起点として立ち上がる。

そのような女性身体が存在できる世界、ジェンダーによる分断を超えてレイシズムに抗う連帯が可能な世界をつくってこそ、本当の意味で帰属できる、未来の「ワタン」へ至ることができる。脅かされ虐げられ、それでも欲望と愛を湛える生身の身体と向き合い、それが人と人との間に結ぶ意味を問い直すことは、詩人ハンマードにとって、帰りたい「ワタン」をいつか取り戻すための道のひとつなのである。

参考文献・資料

- Abuelhiga, Soraya (2013) “‘Woman Walking Heavy/Brown Worlds in her Face’: Global(ized) Identities and Universal Patriotism in the Poetry of Suheir Hamad.’ *The Postcolonialist* 1(1). Retrieved from: <http://postcolonialist.com/arts/woman-walking-heavybrown-worlds-in-her-face-globalized-identities-and-universal-patriotism-in-the-poetry-of-suheir-hammad/> [Accessed 30 August 2018]
- Alyan, Hala (2016) ‘In Dust.’ *Being Palestinian: Personal Reflections on Palestinian Identity in the Diaspora*. ed. Yasir Suleiman, 63-65. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Bosch Vilarrubias, Marta (2011) “‘In love, she remains whole’: Heterosexual Love in Contemporary Arab American Poetry Written by Women.’ *Coolabah*, 5: 62-71.
- Disha, Ilir & James C. Cavendish, Ryan D. King (2011) ‘Historical Events and Spaces of Hate: Hate Crimes against Arabs and Muslims in Post-9/11 America.’ *Social Problems* 58 (1): 21-46.

- Eyerman, Ron (2015) *Is This America? Katrina as Cultural Trauma*. Austin: University of Texas Press.
- Feldman, Keith P. (2007) 'Poetic Geographies: Interracial Insurgency in Arab American Autobiographical Spaces.' *Arab Women's Lives Retold: Exploring Identity through Writing*, ed. Nawal Al-Hassan Golley, 51-70. Syracuse, New York: Syracuse University Press.
- Hammad, Suheir (1996a) *Born Palestinian, Born Black*. New York: Harlem River Press.
- (1996b) *Drops of This Story*. New York: Harlem River Press.
- (2005) *ZaatarDiva*. New York: Rattapallax Press.
- (2006) 'On Refuge and Language.' *Affilia: Journal of Women and Social Work*, 21 (2): 240-243.
- Human Rights Watch (1997) "'Operation Grapes of Wrath': The Civilian Victims.' 1 September. Available from: <https://www.hrw.org/report/1997/09/01/operation-grapes-wrath/civilian-victims> [Accessed 10th September 2018]
- Majaj, Lisa Suhair (2001) 'On Writing and Return: Palestinian-American Reflections.' *Meridians: Feminism, Race, Transnationalism*, 2 (1): 113-126.
- Pickens, Theri Alyce (2014) *New Body Politics: Narrating Arab and Black Identity in the Contemporary United States*. New York; London: Routledge.
- Sikh Coalition, the (2014) 'Fact Sheet on Post- 9/11 Discrimination and Violence against Sikh Americans.' Available from: <http://www.sikhcoalition.org/images/documents/fact%20sheet%20on%20hate%20against%20sikhs%20in%20america%20post%209-11%201.pdf> [Accessed 31st August 2018]
- Shaheen, Jack (2003) 'Reel Bad Arabs: How Hollywood Vilifies a People.' *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 588: 171-193